

65 研医会図書館所蔵24冊本『黄帝内経太素』の報告 その2

誌上発表

安部 郁子

公益財団法人 研医会

筆者は、2022年12月4日の日本医史学会関西支部学術大会で、「研医会図書館所蔵 二十四冊本『黄帝内経太素』について」という発表をした。そこでは帙に貼られていた文と添えられていた原稿箋の内容を報告したが、今回は書籍への書入れについて調べたのでご報告する。

【方法】 研医会図書館所蔵24冊本『黄帝内経太素』の書入れについて調べる。

【結果と考察】 この24冊本の来歴を辿ると、まず仁和寺の秘蔵していた『黄帝内経太素』を江戸時代、浅井家七代の正封（まさよし、貞庵、梅園）が門人らと共にこれを秘密裏に借り出して摸写した。これを継いだ浅井家八代の正翼（まさしげ）は小島宝素と親しく、この『黄帝内経太素』を宝素に貸したらしい。研医会所蔵本の巻五の末には「文政庚寅八月二十九日 尾張 浅井正翼に之を得る。校読一過謹んで蔵す。宝素堂小島質 誌」と記されている。この小島宝素の写本を、「梅菴」と名乗る人物の祖父である「晋菴」が西村良三、後に柳川春三と改名した人物をつかって摸写させて作ったのが、この24冊本『黄帝内経太素』である。こうした事情は帙に貼られた大正四年九月の書付けに語られている。ちなみに、「梅菴」と名乗る人物は、その号から探索すると明治25年に出版された昌平大学同窓名簿の職員欄に「中助教 城井壽章 上毛國土 與太郎」とある城井壽章ではないかと思われる。壽章は歴史書や道徳の教科書などを著した人物である。

つまり、研医会所蔵の24冊本『黄帝内経太素』は小島宝素の持っていたものと同じ内容と思われ、宝素が書き入れた朱書も共に写している。所蔵の30巻24冊本の「巻第二」と題箋の貼られた冊には、「天保壬寅四月二十八日 洪江籀齋 伊澤栢軒 同照素靈二經一校於葆素堂中 質 弘化二年九月二日 參素問靈枢甲乙經校勘」と朱書があり、彼が『素問』『靈枢』と異本関係にあるこの本を、よく古態を残している資料と評価して校勘に使ったことがわかる。

各冊の外題箋には「黄帝内経太素 巻〇」と巻号がある。二、三、五、六、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、残闕、十七、十九、闕、廿三、廿四、廿五、廿六、廿七、廿八、廿九、卅の24冊のうち、朱書の書入れがあるものが、五、八、残闕、廿七の4冊。茶色と朱色の書入れがあるものが、三、六、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十九、闕、廿三、廿四、廿五、廿六、廿八、廿九、卅。また、朱色の書入れだけのものは巻二のみである。この茶色の書入れは少しの文字の乱れなどにも印をつけて本文の上に丁寧な文字で正しく書いたり、虫食い部分を丁寧に書き直しているようなものが多く、厳しい態度で聞いているようで、筆者した本人である西村良三（柳川春三）あるいは摸写をさせた「晋菴」の筆ではないかと思われる。朱色の書入れは小島宝素の持っていた本に書かれた宝素の書入れかと思われ、『素問』『靈枢』『甲乙経』によって虫食いや欠けた文字を類推したり、それら両書との違いなどについて書いている。

同じ小島宝素所蔵の鈔本から写したので当然といえば当然なのだが、研医会本も、『日本漢文学研究』創刊号収載の町泉寿郎「在外日本漢文資料探訪—上海・杭州」（2006年3月、169–205）の図6-1として掲出された復旦大学図書館所蔵、坂春璋『黄帝内経太素』第二首の写真と同じように虫食いや表されておき、先人たちが、それぞれに丁寧に書物を写し取って伝えてきたことがわかり、大変有難いことと感ぜられる。

巻五には、他の冊にはつけられていない朱色の句点がある。朱色の筆が宝素のものを写したとすれば、この「陰陽合」「四海合」「十二水」など「人合」の部分は何かの理由で仔細に読み込む必要があったのだろうか。宝素は後に福井崇蘭館と仁和寺で原本を閲し、さらに鈔本を作ったという。これらの本とは違いがあるのか機会があれば調べたい。